

近森リハビリテーション病院 リハビリテーション部

部長 高芝 潤

はじめに

2024 年度は、理学療法科、作業療法科、言語療法科の各部門と協力しながら、病院全体のリハビリテーション業務を推進した。特に、人員配置の調整や専門的な治療手法の導入により、患者の回復を最大限支援する体制を整えた。また、新入職者を迎え、教育体制の強化や臨床研究の推進にも力を入れた。これにより、各スタッフが専門性を深め、質の高い医療サービスを提供できる環境づくりが進められた。

運営・取組み

2024 年度は、各部門がユニット単位での組織運営を行い、主任または療法士長がユニット管理を担った。新たなスタッフの採用に伴い、OJT を重視した教育体制を整備し、全体の業務品質向上に努めた。また、各病棟の病床稼働率は平均 84%を維持し、患者 1 人あたりの実施単位数は平均 6.38 単位と、提供するサービスの質を維持することができた。特に、運動器疾患の患者が増加したにもかかわらず、適切な人員配置と効果的な訓練計画により、安定したリハビリテーション提供を実現した。

リハビリテーション部全体としては、回復期のリハビリテーションに特化した体制を強化し、患者の早期回復と円滑な社会復帰を支援するための取り組みを進めた。作業療法科では、入院患者の 96.7%に対して作業療法を実施し、上肢機能回復のためのロボット療法や CI 療法を継続的に導入した。また、退院後の社会復帰を支援するために在宅訪問や福祉用具選定を積極的に行った。退院後も患者の生活の質が向上するよう、必要に応じて適切なフォローアップを行い、実生活での適応を支援している。言語療法科では、スタッフ不足の中で提供単位数を確保しながら、摂食機能療法のデータ管理を強化し、低周波刺激装置の本格運用に向けた準備を進めた。患者の状態に応じた最適な療法の提供を目指し、治療の効果を科学的に評価しながら改善を続けている。

教育・学術活動に関しては、各科とも職能団体における生涯学習制度を意識した院内研修を実施し、各部門の専門チームがマニュアル整備やデータ蓄積を継続した。学術活動としても、各学会での発表を積極的に行い、理学療法科では神経理学療法学会やリハケア合同研修大会、作業療法科では回復期リハビリテーション病棟協会研究大会や日本交通安全医療学術大会、言語療法科では日本言語聴覚学会で発表を行った。さらに、これらの学術活動を通じて得られた知見を院内で共有し、日々の診療へ活かすことで、より科学的根拠に基づいたリハビリテーションの提供を目指している。知識や技術の向上は、患者へのサービス向上に直結するため、今後も継続的な研鑽を積んでいく必要がある。

終わりに

2024 年度は、各部門での取り組みを通じてリハビリテーションサービスの質の向上に努めた。特に、教育と研究の強化、人員の適正配置、治療技術の向上に焦点を当てた運営を行った。2025 年度も、さらなる発展を目指し、より良い医療サービスを提供できるよう尽力したい。